

子育ての探究 その七

近世におけるわが子への関心の高まり

柴崎 正行

近世の幕開けとしての江戸時代は、戦いによる支配が終わりを告げた時代でもあった。江戸幕府は各々の国に城下町を作らせることで武士や商人を城下町に集住させ、都市と生産地を分離することによって兵農分離制を完成させ、士農工商と呼ばれる身分制度が確立した。この政策によって民衆支配を確立するとともに

に、それまでは一部の地域に限られていた都市社会が全国的に展開されるようになり、また江戸や大阪というような巨大都市も形成され消費社会を發展させた。こうした都市文化と消費社会の広がりにより、社会の實質的な中心は武士階層から次第に町人層へと移行していった。また農民層も新田の開拓や農耕法の改善な

どによって余剰作物を商品として売ることが可能になったこともあり、経済的なゆとりがもてるようになった。こうした町人や農民層における経済的なゆとりが、子育ての在り方をどう変えていったのであろうか。今回は社会的な安定期にいたった江戸時代において、わが国の子育てにどのような変化が生じたのかを、当時の人々の日記を資料としてみていきたい。

武士階層にみられた子育ての変化

江戸時代の下級武士の生活ぶりとは子育ての様子は、いくつかの日記研究によって明らかにされている。

例えば土佐藩の下級武士である楠瀬大枝が書いた、一八〇九年から一八三五年までの二六年間におよぶ日記を通して、当時の婚姻観や子育て観などが詳細に考察されている（注1）。その日記には、大枝の妻の楯が四人の子を産んだが全員女兒であり男児に恵まれなかったことや、その子どもたちが病気になること

夫婦で看病していること、男児に恵まれなかったことが精神的な負担になったこともあつてか、妻の楯が重い鬱病に罹り、それが原因で大枝から離別された経緯などが書かれている。

この日記からわかることは、当時の武士は家督相続のこともあつて男児の誕生を望む傾向が強かつたし、この楯のように男児を産めないで離縁されることさえもあつたようである。しかし親にとってはどの子ども大事にしていたことは、大枝夫婦が病気の長女楯を徹夜で看病していたことからわかる。当時は病気になる時には、薬師に薬を調合してもらつて飲ませ、祈祷師を招いて必死に無事を祈るしかなかったのである。しかしできるだけのことはしてあげたいという親の気持ち、今のわれわれと何



ら変わりがないといえよう。残念ながら当時五歳であつた緞は看病のかいもなく痲瘡で亡くなってしまつたが、その時の大枝の落胆ぶりは大変なものであつた。こうした子どもへの関心は、その長女の成長が普通の子どもより早いといつて喜ぶ様子が日記に書かれていたことにも表れている。このことから、すでに江戸時代には父親であつても子どもの成長の程度に強い関心があつたことが窺われるといえよう。

また頼山陽の父である春水の日記も残されており、その内容も詳細に検討されている(注2)。それを讀むと春水の妻である静子は四人の子どもを出産したが、夫の春水が広島藩の儒者であり江戸屋敷に赴任することが多く、そのために妻の静子は家事を一人で切り盛りせざるを得なくて大変苦労していることが書かれている。下級武士であつた大枝でも、土佐藩内や遠くは長崎までしばしば長期間出張することがあつたようである。そんなときには、大枝の母親と妻そして子

どもたちが帰宅を待ちわびていたであろう。

いずれにしても、現在のサラリーマンが仕事の都合で出張したときと何ら変わらない家庭像、親子像がそこには見られたようである。現在も国家公務員や大企業などでは長期間の単身赴任を当然のこのように考へているが、その背景にはすでに江戸時代からの武士階層におけるこうした単身赴任制度の影響があるのかも知れない。

町人層における子育ての変化

町人の子育てに関する研究も多くなされつつあるが、その中でも大都市江戸に暮らしていた娘たちの生活ぶりが次第に明らかになっている。お稽古事に励みながらお雛様などに興じる姿は、まさに現在の女の子たちの姿にも通じるものがある(注3)。

ここではそうした大都市ではない地方の小さな都市に暮らす商人家族の生活ぶりを見てみたい。こうした

商人は現在の商店と同じように家族経営をしており、家が商売の場でありまた生活の場でもあった。ではここで子育てにはどのような変化がみられたのだろうか。それを上州の桐生新町で織屋を営む町人の吉田清助一家の子育てを通して覗いてみよう（注4）。

清助は両親、妻さと、長女いと、長男元次郎の他に、女子六人男子一人の奉公人を抱えていた。清助は桐生に店を構えていたが尾張藩江戸屋敷御召服用用聞となつたので、江戸にしばしば商用で出掛けることがあつた。時には仕事の都合で江戸にある妻の兄宅や恩師である国学者の橘守部宅に長期間滞在することもあつた。このときに桐生と江戸に分かれた家族間で頻繁に書簡が取り交わされ、それが残されている。

その内容を読むと、清助がいないと妻のさとが織元の一家を切り盛りしていることや、夫婦間の関心事が子どもたちの成長にあつたことなどがわかる。また妻のさととは元次郎が手習いに通っている様子を知らせる

一方で、父の帰りを待ちわびている元次郎に縁起物の白ねずみをお土産として買ってきてほしいと頼んでいる。また長女のいとは官女のお雛様が欲しくてたまらないと父親に手紙を出しているのである。大都市江戸で流行っていたお雛様を自分も欲しいという、今の娘と変わらない娘心が感じられる。

こうした町人家族の子育てよりは、長期間父親が単身赴任している現在のサラリーマン家族の様子と何ら変わることがないといえまいか。わが子が可愛くて、ついお土産を買い過ぎてしまう甘い父親像は、すでに江戸時代の町人層においても見られたのである。ここには子どもを可愛がり甘やかす親と、親に甘えて物をねだる子ども像があり、先程ふれた武士階層と同様に、自分の子どもたちに関心を注ぎ大切に育てようとする、子育て意識の大きな変化がみられる。

富農層における子育ての変化

では富農層の子育てはどのようなものであったろうか。その様子を上州は勢多郡にある原之郷村の富農船津家の生活ぶりから推察してみる（注5）。

一七九二年の記録によると、船津家には家主の重郎兵衛とその妻と五歳になる男児、弟の松之助夫婦という五人が暮らしていたが、間もなく弟夫婦は分家独立した。この頃の原之郷村は複合家族が分家して、単直系型の核家族が中心となっていたという。この船津家の生活ぶりを当時の資料からみると、文字文化への学習意欲が強く、読み書きの学習はもちろんのこと、俳諧から和歌、漢学にいたるまで幅広く学んでいたようである。また豊富な衣装や家具を購入し、農閑期には余暇を利用して江戸や伊勢など遠くまで頻繁に旅行をしていたという。日常の食事は、銘々膳で一家揃って食べ、かなり余裕のある生活ぶりであったことが窺われる。またこの船津家は地域の手習い塾も開いており、地域の子どもたちに読み書きを教えている。

このことから、富農の子どもたちもすでに読み書きを習い、親が旅をするといろいろなお土産をもらっていたことが予想できる。

加賀国石川郡御供田村の富農である土屋又三郎の描いた「農業図絵」には、年間の農作業の要点が描かれており、その絵から農家の様子を窺い知ることができる（注6）。そこには稲刈りや脱穀というような農作業は、女性だけでなく老人や子どもたちも参加しており、まさに一家をあげての労働であった。特に女性には、田植えや稲刈りだけでなく、除草や養蚕、機織りというように一年を通して働いていた。しかし牛馬を使つての農耕や鋤を用いるような力仕事は担っていないかっただようである。こうして農業では男女の仕事分担が行き渡つていき、実際の子育ては仕事をしながらほとんど女性に任されていたようである。

この船津家の資料や農業図柄などから当時の地方の富農層の子育てぶりが予想できる。昼間は家族で農業

に従事していたが、夜になると夫は文化的な趣味を楽しみ、女性は子どもの世話を担っていた。富農層の男性の多くが読み書きができ、経済的にも余裕があつて消費生活を楽しんでおり、文化的な趣味も有しており博識であつた。また江戸時代中期以降は、こうした富農層も単婚直系家族を形成するようになったために、おそらくは自分の子どもへの財産の継承という問題も含めて、親のわが子への関心は高まつたものと考えられる。経済的な余裕も合わせて考えると、富農層でも子どもたちへの愛着は高まつたものと予想させられる。

貧農層における子育ての実態

それに対して貧農層の子育てはどうであつたらうか。江戸時代は貨幣経済の発達によつて、一般農民の間でも貧富の差が大きくなつてきた時代でもある。農地を手放して小作人として働いていた下層の農民はどのような結婚や出産をしていたのだろうか。貧農の男

児は、長子以外は豪農のもとで仕事を手伝つたり、早くから職人や商人などのもとに見習いとして奉公に出されるが多かつたようである。また女兒は豪農の家に下女に出されたり、大きな商家に奉公人として出されることが多かつた。その中での結婚や子育ては、中世と変わらない厳しさがあつた。

多摩地方の柴崎村（現立川市柴崎町）の鈴木家で住み込みの下女をしていたさんが一八四四年に妊娠したので、その相手を問い詰めて内輪の婚姻をあげさせた。その後には出産したので、さんの母親が代理として鈴木家に住み込んで下女として働いた。出産後三週間目にさんは無事仕事に復帰したので、母親は今度は家に戻つてきんの代わりにその赤子の世話に当たつ



たという。また同じく鈴木家の下女のうたは妊娠した
が実家に帰って墮胎し（二八四八）、その後結婚し
たという（注7）。

このように貧農層においては、男性も女性も結婚や
出産もなかなかままならなかった。下人の労働力は、
主人にとって欠かせないものであり、もし病気や出産
で休むときには「奉公人請状」という契約書によって
代理の働き手を差し出さねばならなかったし、もしそ
れが不可能であれば働き続けるために墮胎するしかな
かったのである。江戸時代においても墮胎が行われ
ていたが、その背景にはこうした労働者層として雇わ
れた貧農層の苦しみがあったといえよう。町人層や富
農層と比べると、貧民層の子育てはまだまだ厳しいも
のであったといえよう。そして飢餓などでは、その貧
民層が一番苦しい立場におかれたのである。私の印象
にあった子殺しは、まさにこの貧民層の実態でもあつ
たといえる。

（東京家政大学）

注

- 1 太田素子『江戸の親子』中央公論社 一九九四年
- 2 鈴木ゆり子『農村女性の結婚』（林玲子編『女性の近世』
中央公論社 一九九三年）
- 3 森下みさ子『娘たちの江戸』筑摩書房 一九九六年
- 4 高橋敏『家族と子供の江戸時代』朝日新聞社 一九九七
年
- 5 高橋敏 前掲書
- 6 長島淳子『働く農村の女性たち』（林玲子編『女性の
近世』中央公論社 一九九三年）
- 7 増田淑美『農村女性の結婚』（林玲子編『女性の近世』
中央公論社 一九九三年）